

# 日本の地域性研究における類型論と領域論

上野 和男

- 
- |              |             |
|--------------|-------------|
| 1. 問題        | 4. 起源・動態・構造 |
| 2. 類型論の系譜と発展 | 5. 結論       |
| 3. 領域論の展開    |             |
- 

## 論文要約

本稿は最近における日本の社会文化の地域性研究の学史的考察である。日本の地域性研究を時期的に区分して、1950年代から1960年代にかけて各分野で地域性研究が活発に行われた時期を第1期とすれば、最近の地域性研究は第2期を形成しているといえる。第2期における地域性研究の特徴は、第1期に展開された地域性論の精緻化にくわえて、新たな地域性論としての「文化領域論」の登場と、考古学、歴史学などにおける地域性研究の活発化である。1980年以降の地域性研究の展開にあらわれた変化は次の3点に要約することができる。まず第一は、従来の地域性研究が家族・村落などの社会組織を中心としていたのに対して、幅広い文化項目を視野にいれて地域性研究がおこなわれるようになったことである。地域性研究は「日本社会の地域性」の研究から「日本文化の地域性」の研究へと展開したのである。第二は、これまでの地域性研究が現代日本の社会構造の理解に中心があったのに対して、日本文化の起源や動態を理解するための地域性研究が登場したことである。とくに文化人類学や歴史学・考古学のあらたな地域性論は、このことがとりわけ強調されているものが多い。第三は、これまでの地域性研究が社会組織のさまざまな類型をまず設定し、その地帯的構造を明らかにしてきたのに対して、1980年以降の地域性論では、文化要素の分布状況から東と西、南と北、沿岸と内陸などの地域区分を設定することに関心が集中するようになったことである。つまり「類型論」にくわえて「領域論」があらたな地域性論として登場したことである。本稿では地域性研究における類型論と領域論の差異に注目しながら、これまでの地域性研究を整理し、その問題点と今後の課題、とくに学際的な地域性研究の必要性と可能性について考察した。